

大学生の老人観および老親への責任意識

○ 茨正女子短期大学 細江 容子
お茶の水女子大学 保坂久美子

〈研究の目的〉

産業化の進展に伴い、われわれの社会は業績主義と効率主義の価値観が浸透し、「若さ」や「生産性」が重視される傾向にあるといわれている。こうした社会においては生産性が乏しい老人の地位は低下し、老人は「無能なもの」「役に立たないもの」としてとらえられる傾向にあるといわれている。このような時代の中で着年近か増える老人親や老親への責任意識を知ることは、老人問題教育を進めていくうえでも意義のあることと思われる。

ここでは、1)今日の着年層かどのような老人イメージや老親への責任意識を指しているのか、2)老人イメージや老親への責任意識は何によって規定されるのかを知ることとを目的とした。

〈調査対象〉

調査の対象は東京都内の大学7校(国立大学2校、私立大学5校)の学生544名に対して自記式・質問紙法による調査を6月6日から7月にかけて実施した。回収票のうち記入不備のものも含まれ、配偶者のある者2票を除き全部で567票を分析した。

〈サンプルの基本属性〉

①出身地(小学校の頃まで住んでいた所)
大都市 32.5%, 中都市(人口15万以上) 33.3%, 小都市A(人口5万以上15万未満) 12.3%

②家族構成

核家族... 73.4%

直系家族... 19.6%

③家族員数

4人 43.4%, 5人 28.2%, 6人 15.3%

④本人のきょうだい関係

男きょうだいありの娘 28.0%, 兄弟ありで長男 24.9%, 兄弟ありで次男以下 13.4%

⑤父の職業階層

経営管理職 31.9%, 専門技術職 17.5%, 商工サービス・自営職 15.7%, 事務職 15.2%

⑥祖父母との同居経験

父方祖父母で7割が同居経験なし、母方祖父母で8割が同居経験なし。

〈分析結果〉

①老親への責任意識

全体として大学生の老親への責任意識はかなり強いが、この責任意識を規定するものは本人の出生順位もさることながら、本人の家族への満足度が規定要因となっていた。

②老人に対するステレオタイプイメージ

大学生が老人に対して持つ誤ったステレオタイプイメージは、若者よりも初年よく働けない自分の型にはまっただけをなかなかなることでない病弱不信心深いといった老人である。老人に対して正しいイメージを持つている者は学校教育(学校では老人問題に関して影響を受けていなかったのか)ではなくマスコミからの影響であった。

③SD法による老人のイメージ

老人のイメージの構造をとらえるため因子分析を行いその規定要因を分析した。その結果、規定要因は因子によって異なるが、主な規定要因は性別、老人と話す機会、老人問題への関心、マスコミへの関心、同居経験、祖父母への思い、老人に対する認知、出身学部であった。